法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-31

〈論文〉沖縄のハンセン病文学

浦田，義和

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文学誌要
(巻 / Volume)
103
(開始ページ / Start Page)
53
(終了ページ / End Page)
67
(発行年 / Year)
2021-03-24
(URL)
https://doi.org/10.15002/00025432

〈論文〉

沖縄のハンセン病文学

浦田　義和

一　島木健作「癩」

プロレタリア文学作家島木健作の「癩」（1934年）は、1928年の日本共産党等への弾圧事件「3，15事件」で検挙・投獄された島木の体験を基に創作された小説である。

主人公の「太田」は、刑務所で喀血し、肺結核と診断され、隔離病棟に移された。そこには「らい」病者が数人おり、その姿に驚愕するとともに、その中の一人にかつての同志である「岡田」を見つけ、岡田が未だ思想を捨ててないことを知る、という内容である。

太田は、獄舎の中で次のように煩悶する。

この厳しい、激しい、冷酷な、人間を手玉にとって翻弄するところのものが今日の現実というもののほんとうの姿なのだ。そしてそういう盲目的な意志を貫ぬこうとして荒れ狂う現実を、人間の打ち立てた一定の法則の下にしっかと組み伏せようとする、それこそが共産主義者の持つ大きな任務ではなかったか。そして、自分も亦、その為に闘って来たのではなかったか。――そうは一応頭のなかで思いながら、彼の本心はいつかその任務を果すための闘争を回避し、苦しい現実の中から、ただひたすらに逃げ出すことばかりを考えているのであった。彼は積極的に生きようという欲望にも燃えず、凡ての事柄に興味を失い、ただただ現実を嫌悪し、空々寞々たる隠者のような生活を夢のように頭のなかにえがいて、ぼんやり一日をくらすようになっ

た。それは、結局はやはり病にむしばまれた彼の生気を失った肉体が原因であったのであろうか。――だが、時々は過去に於て彼をとらえた情熱が、再び暴風のようにその身裡をかけ巡ることがあった。太田は拳を固め、上気した熱い頬を感じながら、暗い独房のなかで若々しく興奮した。しかし次の瞬間にはすぐに「だが、それが何になる、死にかかっているお前にとって！」という意地のわるい囁きがこえ、それは烈しい毒素のように一切の情熱をほろぼし、彼は再び冷たい死灰のような心に復るのであった。[1]

煩悶する「太田」に対して「らい」者は、次のように描かれる。

身体がもう半ば腐って居りながら、なんとその生活力の壮んなこと！　食欲は人の数倍も旺盛で、そのためにしばしば与えられた食物の争奪のためにつかみ合いが始まるほどであり――又性欲もおさえ難く強いらしく、夏のある夕べ、かの雑居房の四人がひとしきり猥らな話に興じたあげく、そのうちの一人が、いきなり四ツんばいになって動物のある時期の姿態を真似ながら、げらげらと笑い出したのを見た時には、太田は思わず、ああ、と声をあげ、人間の動物的な、盲目的な生の衝動の強さに打たれ、やがてはそれを憎み、――生きるということの浅ましさに戦慄したのであった。[2]

このような対照的描写は、この小説の主題が、もちろん「らい」者の尊厳を表現する事ではなくて、主人公「太田」の煩悶と非転向者「岡田」を描くことであり、「らい」を遠景化している。

岡田は次のように描かれる。

彼はいつもここの世界には不似合な平然たる顔つきをし、運動の時にはもう長い間、何回も歩き慣れた道のように、さっさと脇目もふらずかの花園の間の細道を歩くのである。（略）運動時間ごとに見るその顔は病気に醜く歪んではいるが、格別のいらだたしさを示すでもなく、その四肢は軽々と若々しい力に満ちて動くのである。[3]

岡田がそのように他の「らい」者と違うのは何故だろうかと「太田」は考える。

彼にあっては万事がもうすでに終っているのだ。そういう岡田は今日、どういう気持で毎日を生きているのであろうか、今日自分自身が全く廃人である事を自覚しているはずの彼は、どんな気持を持ち続けているであろうか、共産主義者としてのみ生き甲斐を感じ又

生きて来た彼は、今日でもなおその主義に対する信奉を失ってはいないであろうか、それとも宗教の前に屈伏してしまったであろうか、彼は自殺を考えなかったであろうか[4]？

そのような太田に対して、岡田は次のように言うのである。

「只これだけのことははっきりと今でも君に言える。僕は身体が半分腐って来た今でも決して昔の考えをすててはいないよ。それは決して瘠せ我慢ではなく、又、何かに強制された気持で無理にそう考えているのでもないんだ。実際こんな身体になって、尚瘠せ我慢を張るんでは惨めだからね。――僕のはきわめて自然にそうなんだ。そうでなければ一日だって今の僕が生きて行けない事は君にもよくわかるだろう。……それから僕は、どんなことになっても決して、監獄で首を縊ったりはしないよ。自分で自分の身体の仕末の出来る限りは生きて行くつもりだ[5]。」

つまり作者島木は、思想の優位性、超越性を「岡田」の描写によって示していると言える。「らい」者の精神を支える可能性として「思想」があるかもしれないというパターンの一つを提示したとはいえるかもしれないが、しかし、それは極めて観念的である。「らい」者の描写が、極めて皮相的だからである。「らい」者の実存に迫る描写は選択されず、「らい」は、あくまでも副次的なものとして描かれていた。

二　與儀正昌「顚末」

さて、島木「癩」の翌年1935年に雑誌『文學界』に掲載された沖縄の作家與儀正昌に「顚末」という小説がある。

「顚末」は、1918年の沖縄北部名護伊差川周辺（後に愛楽園が立てられた屋我地島から4，5キロ）と目される架空の「姫住村」を舞台に、鉱山採掘に反対する村中の宗家としての「村元」の親爺と、その親爺の次女の婿で鉱山採掘で一儲けしようという区長との争いが描かれている。区長の「我部」は、相場仲間の那覇の商人「国場」にそそのかされ、鉱山採掘に手を出し、村の大事な山に試掘を始める。親爺の長女で白痴の巫女の占いで村に禍が来ると予言され、その年の秋、村に流行性感冒（スペイン風邪）が流行しだし、「我部」は、親爺や村人に責められる。「我部」は、その年の初めころから太股の赤い斑点に気づいていたが、「らい病」と分かり、妻を流行性感冒で失くし、さらに肉体関係にあった白痴の巫女もハブに噛まれて死に、彼は谷底に身を投げるという結末になる。

この作品で、病気は次のように描写されている。

「ただ腐れ落ちて行く醜穢な自分の肉体ばかりが眼に浮んで来る」「妻の腹の中で蠢いているという赤ん坊のことを思うと、その子の将来までが思われて彼の苦しみは二重になる」とあり、秋の半ばになると「彼の顔は汚らしい吹出もののように所どころ腐れかけて醜く歪んでいた」。「我部」は「或る時は天の眼が激しく自分のしたことを凝視しているように思われて恐れ戦くのであった」「自分の業病を思い、嘗ては鉱山のことで親爺を苦しめたことを思うと、たとえそれが自分の信念から成された仕事だったとはいえ、あの頃の親爺の呪いの言葉までが思い出されて来て、我部には事実自分自身が罰当たりではないかとさえ思われて来るのであった[6]」。

本作品で、主人公は、美人の妻を失いたくない利己心からくる金銭欲のため、自然と共生する村の掟を破り村の山に穴を開け、親爺に逆らい、自分の跡継ぎが欲しいという利己心のため、白痴の巫女と関係を持ち、親爺を騙した。それらの悪事のせいで、「業病」という天罰が下ったと描かれていた。

小説が発表された1930年代のハンセン病をめぐる時代状況は、1931年国際連盟の「らい公衆衛生の原理」で早期感染者の隔離政策からの脱却が示され、日本の医学者小笠原登の論文「らいに関する三つの迷信」でも、その伝染力の弱さが指摘されたにもかかわらず、当時の日本政府は正式な法律として「癩予防法」を成立させ、患者の強制隔離に乗り出した。数年前からの「無らい県運動」など、政府による情報操作は国民の間に行きわたり、作家島木健作も「らい」を死病と認識し、沖縄の與儀正昌は遺伝する業病と恐れていたということになるだろう。

「顚末」の作者の與儀正昌は、仲程昌徳『沖縄の文学』によれば、沖縄から上京し、1927年、1928年の文芸雑誌『創作時代』（編集顧問　菊池寛、編集責任　片岡鉄平、横光利一、川端康成、菅忠雄ら）に短歌を発表、1934年横光の推薦によって文壇文芸雑誌『文學界』に小説「榕樹」を発表した。

三　北條民雄

「顚末」は、川端の推薦で発表されたらしいが、その川端康成が文壇に登場させたハンセン病文学者が北條民雄である。北條の代表作「いのちの初夜」は、「顚末」と同じく翌年の『文學界』1936年2月号に掲載されている。当時新興の文学雑誌『文学界』は、2年続けてハンセン病関係文学作品を掲載したことになる[7]。

「いのちの初夜」は、次のような内容である。

「らい」と宣告された「尾田」は、入院してすぐに、これまで数回企てた自殺を決行しようとしたが、また失敗した。その現場を見た介添え人で病者の「佐柄木」から次の

ように諭される。

「人間ではありませんよ。生命です。生命そのもの、いのちそのものなんです。僕の言うこと、解ってくれますか、尾田さん。あの人達の『人間』はもう死んで亡びてしまったんです。ただ、生命だけが、ぴくぴくと生きているのです。なんという根強さでしょう。誰でも癩になった刹那に、その人の人間は亡びるのです。死ぬのです。社会的人間として亡びるだけではありません。そんな浅はかな亡び方では決してないのです。廃兵ではなく、廃人なんです。けれど、尾田さん、僕等は不死鳥です。新しい思想、新しい眼を持つ時、全然癩者の生活を獲得する時、再び人間として生き復るのです。復活、そう復活です。ぴくぴくと生きている生命が肉体を獲得するのです。新しい人間生活はそれから始まるのです。尾田さん、あなたは今死んでいるのです。死んでいますとも、あなたは人間じゃあないんです。あなたの苦悩や絶望、それが何処から来るか、考えて見て下さい。一たび死んだ過去の人間を捜し求めているからではないでしょうか。[8]」

「らい」者の異様な姿に絶望した「尾田」に実存の覚悟を説いた「佐柄木」の復活の道は次のような「表現」行為にあると示されている。

「盲目になるのは判り切っていても、尾田さん、やはり僕は書きますよ。盲目になればなったで、またきっと生きる道はある筈です。あなたも新しい生活を始めて下さい。癩者に成り切って、更に進む道を発見して下さい。僕は書けなくなるまで努力します。[9]」

作者の北條民雄は、この作品を「そして佐柄木は一つ大きく呼吸すると、足どりまでも一歩一歩大地を踏みしめて行く、ゆるぎのない若々しさに満ちていた。」という文章で締めくくった。作者にとって「書く」という行為が、「らい」者にとっての光明の入り口の一つとして示されていると受け取れる。しかし、「らい」者の実存は、このような教訓的なハッピーエンド小説を裏切ることになるであろう。

北條民雄が入院していた全生病院では書簡類は検閲されていて、この「いのちの初夜」も、検閲が意識されていたとみることが出来る。『定本　北條民雄全集下巻』（東京創元社、１９９６年）の巻末「覚書」で、編者の川端香男里は、全生病院検閲係より川端康成への次のような書簡を紹介している。

（前略）只今御手許へ御送付申上候二編は本院の統制上之れが発表せられるは甚だ面白からざる事と存ぜられ候（後略）昭和十二年十二月卅一日

ここに書かれている2篇とは「青春の天刑病者達」と「癩を病む青年」である。

「青春の天刑病者達」は、語り手の「私」に、同病者の義妹「利根子」がしつこく、同じ同病者の「みづ江」との結婚を迫る。「私」は、同病者同士の結婚生活が「丸切り猩々と猩々とが愛し合っているような有様」に「プライド」が許さないと言う。かといって孤独生活で定期的に訪れる「ヒポコンデリアックな憂鬱と苛立たしさ」からも解放されたいと、悩んでいる。一方、「私」は、「利根子」が同病者の「秋津」に好意を寄せており、「みづ江」が「秋津」に近づくことを警戒しているからではないか、と思ったりする。母の愛情を知らない「私」と違って「利根子」は「母の肌を知っている」から「この私等の世界のような冷酷な現実の中に投げ込まれた者にとっては、豊かな愛情を受けた者ほど不幸なように思われる」と思い、「みづ江」に対しても「この暗黒に慣れ、自分の住んでいる世界が地上いずこにもない恐るべき世界であるということすら気付いてはいない」と思う。結局「この暗黒さが彼等の意識に映らざるを得なかった時、彼等はどうなるか、恐らくは彼等自身の内部に潜んでいる若い血が彼等を殺すに至るであろう」と思い、「私」は私自身の若い性欲を無理に押し込めてしまうのであった。[10]

「癩を病む青年達」では、重病室の悲惨な有様を「それは社会の底を、人類の底を土龍のように生きている一つの種族だったのである。東洋人でもなければ西洋人でもなく、また南洋土人でもない、その何れの範疇にも属さぬ『癩種族』なのである。全人類から滅亡を迫られ亡ぶることによってのみ人類に役立つナリン棒の種族なのである」と描写し、「彼等は終日食べものの話か女の話かで時を過ごす」と述べながら、しかし「そうした話と同様に彼等の興味が社会事情にも向けられている」と述べ「無意識的に彼等が社会へのあこがれを蔵しているということと、現在の自己を忘れたい、自己を病室に置き度くないという欲求の表われである」と述べている。[11]

「癩を病む青年達」は、どうやら「女の話」と「社会の話」を軸に展開しそうな気配を残したまま中断している。

「青春の天刑病者達」と「癩を病む青年達」の両作品に共通するものは、「性」への言及である。性に悩む青年たちの姿と、断種手術がほのめかされてもいる。この「性」の話題と、「青春の天刑病者達」には、他に「監禁室」や「狂病棟」への言及もあり、「癩を病む青年達」での「社会の話」などが、全生園側の忌避した、患者の実存でもあった。

北條民雄は、「いのちの初夜」出版成功後も、病気の悪化のために様々に悩み苦しむことになるが、これ等の小説を通して、「らい」者の実存が垣間見られる。

四　明石海人『白描』

「いのちの初夜」の翌年に歌人明石海人の歌が11首、太田水穂、北原白秋、窪田空穂、斎藤茂吉、佐佐木信綱、釈迢空、土岐善麿、前田夕暮、与謝野晶子、尾上柴舟が審査に当たった改造社の『新万葉集』（1937年12月から1938年9月）に収録され、歌壇の注目を集めた。明石海人は1932年11月に長島愛育園入園後、1934年頃から作歌をはじめ、翌年1月水甕社入社、その後同年8月「日本歌人」に入会し、前川佐美雄に影響を受ける。

『新万葉集』に載せられた歌は、「紀州粉河の近在に独居して病を養ふうち、たまたま子の訃報に接す。事過ぎて既に旬日の後なり」と後の刊行された歌集『白描』中で前書きされた「世の常の父子なりせばこころゆく歎きはあらむかかる際にも」をはじめとした、父や母や兄、妻など家族を歌った歌7首に「拭へども拭へども去らぬ眼のくもり物言ひさして声を呑みたり」と自分の病気の歌1首、園を歌ったもの1首、それに「皇太后陛下の御仁慈を偲び奉りて」と前書きされた「みめぐみは言はまくかしこ日ノ本の癩者に生れて我悔ゆるなし」のように皇室を歌ったもの2首である。「新万葉集」が、当時、日中戦争に突入した国の時局と無関係でないことは別巻に「宮廷篇」があることからも頷けるし、ハンセン病施設と皇室は、奈良時代の光明皇后の病者・孤児・貧者救済施設設置という歴史および当時の貞明皇太后による「らい予防協会」設立など、関係が深い。このように見てくると、海人の『新万葉集』収録歌は、大体においては時局に配慮された穏当な歌と言える。しかし、中には園を歌った「監房に罵りわらふもの狂ひ夜深く醒めてその声を聴く」という問題歌が含まれていた。

海人は『白描』（改造社、1939年）巻末の「作者の言葉」で「第1部白描は癩者としての生活感情を有りの儘に歌ったものである。けれど私の歌心はまだ何か物足りないものを感じてゐた。あらゆる仮装をかなぐり捨てて赤裸々な自我を思ひの儘に跳躍させたい、かういふ気持ちから生まれたものが第2部翳で」あると述べている。[12]

『新万葉集』収録の海人歌は、全て著書『白描』第1部にあるが、第2部翳にある海人の実存の歌は、次のようなものである。

室々に背を向けてゐる影いくつ夜の敵意はいつかな熄まず

こんなとき気がふれるのか蒼き空の鳴りをひそめし真昼間の底

夜をこめてかつ萌えさかる野の上にいちめんの星はじけて飛びぬ

五　国本稔

さて、このように「ハンセン病」が、外面的描写から明石海人において実存的描写へと深まったことを指摘したが、次に沖縄の病者による「ハンセン病」文学を取り上げよう。

沖縄愛楽園入所者の国本稔（１９１６～１９８６）は１９５０年11月3日～26日、新聞『うるま新報』（『琉球新報』の前身）に小説「紅い蟹」を発表した。[13] 国本は、『終着駅からの手紙　国本稔遺稿集』によれば、沖縄北部の本部町謝花生まれ、１９３１年発病、大阪西成区の兄のところに暫らく居た後、１９３７年岡山の長島愛生園に入園、１９３９年、全生病院を経て、鹿児島鹿屋市の星塚敬愛園へ転園、その後長島愛生園にもどり、そこで終戦を迎え、１９４５年、結婚。１９４７年沖縄愛楽園に入る。１９５３年星塚敬愛園へ再入園。そこで、30年近く暮らし、１９８２年、故郷沖縄の愛楽園に再入園。4年後癌のため死去している。国本は、文学者との交流も多く、長島愛生園では、明石海人、全生病院では、内田静生、戦後、沖縄愛楽園では、沖縄の作家グループの大城立裕、嘉陽安男、渡久地春子、山田みどりのいわゆる「文芸サロン」の面々、鹿児島星塚敬愛園時代では、沖縄の歌人呉我春男らと交流している。

北條民雄『いのちの初夜』の14年後、明石海人『白描』の11年後の１９５０年に発表された「紅い蟹」の内容は、次の通りである。

那覇市生まれの「京二」は中学3年時に発病し、「国頭の療養所（愛楽園）」入所を親から反対され、戦時下１９４４年岡山の国立癩療養所長島愛敬園（長島愛生園）に入る。そこで同じ沖縄出身の入所者「啓子」に出会い、肉体関係を持ってしまい、園の規則によって、断種手術を受けざるを得なくなる。

「紅い蟹」は、長島に渡るための海岸の船着き場で親子の蟹を見つけ、親蟹に逃げられ子蟹だけを捕まえ叩きつぶして「そうだ、親も子も異った細胞に包まれた、別個の肉体と心情に生きる。即ち個の存在ではないか」と思うような内省的な主人公が描かれている。この小説で、病気は次のように表現された。

まず「愛敬園連絡所」の「何ッ沖縄？　馬鹿野郎！」「生意気な奴じゃ、癩患者のくせに、つかつか玄関へ入りやがって」と怒鳴る男の対応に、「いま、あの島には幾百の人間が、苛酷な運命を呪い続けているかも知れない。差別と侮蔑の鞭の下に、動物にも等しい生活が繰り返されているかも知れない。人格も人権も無視されたものの次に来る結果として、反目、喧噪、呪詛と悲鳴の絶え間ない世界、この世の生地獄、ああ惨憺たる世界が自分を待っているのではあるまいか」と「私」は思うのである。

入所してから目にする病人の姿について「膿汁のはみ出

た顔や、二重にも三重にもぐるぐる巻きに繃帯を巻き重ね、その繃帯の割れ目から、目と鼻と口だけを、突き出した繃帯坊主の顔（略）それらの顔や身体が、この湯槽の中に、かわるがわる浴びる光景を想像して、身の毛のよだつ悪寒を覚えた」と叙述される。また覗いた外科室で「（外科医は―引用者注）腐った肉を切り割き、中の骨を鋏でぷつんと切り落した。傷の男は心持、身をくねらせ『うゝん』と唸ったが、直ぐけろりとした表情に変り、／『また手の指が一本減っちゃった』とにたにた笑った」「（別の患者の傷口を―引用者注）ぶすりと縦に、肉をえぐった。途端にぱっと、血膿が吹き上げ、外科医の予防衣に散った。／ああ何と云う惨憺たる光景だと、私は入口に身体を竦めていた」と叙述されている。

また、園内結婚について「郷里を追われ、肉親に見放され、あまつさえ重り行く病に焦燥を感じると、きまって異性への憧れと、依存心を起こさせるのであった」と感想を述べ、木陰での男女の抱擁を見て「私は腐り果てゝゆく肉体の中にも、なお残存する人間の本能のあさましさを考えずにはおれなかった」と批評している。

他に戦時下という時勢を「患者達は寄ると触ると、敗け戦とは知りながら、なおも戦争を続ける軍部を呪い、顔の影の映る、粥を食わせる園当局を罵った」と批判している。この点は、本作品が戦後の而も米軍支配下での発表という状況も考慮される。

この作品は「『ああ沖縄は滅びた、僕の肉親も死んだ、あと十五分すれば、僕の生命も、いや男としての生命も滅びるのだ、上間家の系図に、終止符がうたれるのだ。』／天地に訴えて泣きたいばかりの衝動を、じっと抑えて、私は手術台に上ると、身体を横たえた」と、その絶望感を沖縄や家族への郷愁に絡めて訴えることで終わる[14]。

ところで「紅い蟹」には、先行する「いのちの初夜」と類似する点がいくつかある。

物語の筋について、冒頭部分で、「紅い蟹」では、療養所のある長島に渡る岡山県瀬戸内市邑久町虫明海岸で子蟹を叩き潰すが、「いのちの初夜」では、やはり冒頭部分、主人公の「尾田」が入院の前、自殺を思っての江ノ島海岸で「赤い蟹が足許に這って来るのを滅茶に踏み殺すと急にどっと瞼が熱くなって来たのだった」という描写がある。次に「紅い蟹」では、主人公の「京二」は、部屋に閉じ込められた自宅が火事になる夢を見るが、「いのちの初夜」では、付添人から追っかけられ「火炙り」になる夢を見る。

また、登場人物については、「紅い蟹」の付添人は「小田」で、「創作」を書いており、「京二」に「誰かが云ったように『早く癩者になりきる』ことだよ」と助言する。一方「いのちの初夜」の主人公は「尾田」で、付添人「佐柄木」は小説を書こうとしており、「尾田」に「とにかく、癩病に成りきることが何より大切だと思います」と助言する。なお、「癩病に成りきること」については、国本の「終着駅

からの手紙」に、東京多磨全生園でハンセン病文学者「内田静生」が言った言葉として、記してある。

これらのことから、「紅い蟹」は「いのちの初夜」をヒントにしていると言えるかもしれない。しかし、「いのちの初夜」が、悲惨な病者の様態の描写をはさみながら、死の誘惑から、「佐柄木」を通して生を希求する心境への変化が書かれている小説だとするなら、「紅い蟹」は、同じく悲惨な病者の様態を表現しながら、家族や社会による差別、沖縄戦、断種手術、それらの不条理を訴える小説になっていたと言えるだろう。

国本の他の小説として愛楽園を舞台にした「老婆」がある。

ある老婆が自分の息子に会いに来たが、間違って「私」が呼び出され、面会することになる。丁度クリスマスの余興の演劇の途中で、「私」は、間違われたことから、急に舞台で演技することが馬鹿馬鹿しくなり、迫力のない演技になってしまった。その後「私」は「あの時、自分は何うして、ああ、よぼよぼの老婆に、肉親の母を感じたのだろう。母にしろ、兄弟にしろ、それは、とうの昔に、私の中から消え去っていたのではなかったか。孤独、そうだ孤独の人生を肯定し、その肯定の中に、生活も感情も一貫して置いてきた自分ではなかったか」と述懐する。しかしその「孤独」のふりこそ嘘ではないか「やっぱり自分の体の底に潜在し、流れていた血が、人の世の愛と泪を欲しくなったのかも知れない。そうだ、そうだとも。肉親の愛が欲しくなったんだ。いや今だって母に逢いたがっていたんだ」と思いなおし母に手紙を出すのだが、母は既に死んでいたことを知らされ「私が母に逢えるのは天国より外にない。然もその天国すらが、悲しい事に、私にはたやすく信ずることが出来ないのである」と思うのであった。[15]

「私」の心境を省みながら、心の揺れを表現していた。この小説に、芥川賞受賞作家大城立裕は「当時の私などが及びもつかないたしかな筆致で、人間の深淵が書きこまれていた」（『終着駅からの手紙』）と評価している。

前述したように明石海人は短歌で病者の実存を表現したが、沖縄の国本は、次のような詩を戦後発表している。

ちちとははの愛は／瀬戸の／この島にあった／友愛のいずみも／この島にあった／瀬戸の／海はうつくしく／みどりおおき長島は／わたしの／こころのふるさと／にくしみがあったのではない／かなしみがあったのではない／なぜか／墳墓の地／沖縄へかえりたくなった／（略）ああいま／ふみにじられ／ひきさかれ／みどりなきふるさとの島へ／わたしはかえる（「別れの詩」[16]）

この詩は、国本が岡山の長島愛生園から、戦後１９４７年に沖縄愛楽園に転園するときの詩である。国本は１９３

1年沖縄で発病した時、親から地元での入園を拒まれ、長島愛生園へ行っていたのである。「こころのふるさと」を離れるのは、「ふみにじられ／ひきさかれ」た、つまり沖縄戦でボロボロになった故郷への哀惜からであろう。国本にとって親への怨恨を吹き飛ばすほどの「世紀の戦争」であった。

沖縄に帰ってからの詩と思われるのが、次の「帰郷」である。

海のかなたから幸せをはこぶ／ニライカナイの神／祖霊を祭る人々のこころは暗く／みどりふかいところに／ユタの仲間はかくれ／姫百合の塔にも／おとめたちは静まれない／／この小さな島は／怪獣の足に／踏みにじられている[17]

この詩では、米軍事支配下の沖縄が政権批判的に描かれていた。

これ等の詩では、明石海人の短歌と違って、ハンセン病は主題になっていない。

次の詩は、制作年代が明らかでないが、国本は沖縄愛楽園に転園した6年後の1953年鹿児島星塚敬愛園に再転園している。

積乱雲の空に／ある日／突如／核爆発の閃光がはしる／地表めがけて／死の雨を降らせ／灰をまきちらす現代の恐竜（「悪魔のいる風景」[18]）

このような詩から、国本の詩ではハンセン病は後景に退いて、社会批判が前面にせりだしているように思える。海人『白描』出版は戦前、川端康成など一部の人たちには伝染性が極めて弱いと認識されていたにも関わらず1931年の「癩予防法」成立後の苛酷な隔離政策渦中のことであるが、国本の詩作は、戦後、国際的に隔離政策批判がなされている中で日本では1948年優生保護法や1953年「らい予防法」の成立など、隔離政策が温存されている状況で、両者を取り巻く差別の状況は変わっていなかった。

国本は、後に次のように述べている。

島（長島愛生園―筆者注）の人たちは宗教に熱心で、文学にも集中するものもいました。ライを生きていくには宗教に救いを求めるか、文学にその活路を見出すか、その二つの道しかなかったかも知りません。当時、後になって「白描」で有名になった歌人の明石海人などがいて、わたしはよく彼を訪ねたのですが、書棚に聖書があるので「神を信じているのですか」と尋ねると「いや、聖書は文学の資料にしているのですよ」と言われたのが印象的でしたね。海人は盲目でしたが、彼にとって文学するということは生きていることの証

だったかも知りませんね。
（『終着駅からの手紙』p69、初出は1983年12月『解放教育』NO174）

国本は、どうやら「文学」ではなく、「宗教」に救いを求めたようだ。
国本の妻阿波根ハルは、

夫は文学に心を向けてはおりましたが、やはり第1に大切にしていたのは信仰生活だったと思います。夫は私と結婚する前、一九三五年に長島愛生園で、ウォールズ牧師より受洗していました。そして結婚後は毎朝夕、夫婦で祈り、聖書を読むのを何より大切な日課として、最期まで守ってまいりました。[19]

と述べ、また病友島清も、

文学作品を書くことは彼の生き甲斐であり、また目標でもあったと思う。しかし彼の本当の目標は神であり、信仰であり、「我らの国籍は天にあり」という聖書のみことばの如く、彼は今天の故郷にあって安らかに過ごしているのではないか。[20]

と述べている。

国本は、鹿児島愛生園で30年近く暮らし、1982年再び沖縄愛楽園へ帰った。
次の詩は、恐らくそこで作られたようだ。

地上のすべてと別れるときが来た／私は永遠の国へいそがねばならない／この世の苦しみを捨てて／父母のいる遠い国へ／そこでわたしの魂はやすらかに／キリストにもお目にかかりたいのだ（「柩の中から」[21]）

国本はこの後沖縄愛楽園で1986年癌のために70歳の生涯を閉じた。
小説「紅い蟹」では、断種手術を受ける絶望感が、「老婆」では、母への愛と「らい」者としての孤独感が表現されていたが、詩では、ハンセン病者としての苦悩が、キリスト教信仰によって薄められ、社会批判が主題になっているとまとめられよう。

六　大城貞俊「椎の川」と目取真俊「ホタル火」

これまで、沖縄のハンセン病文学として、與儀正昌「顚末」および国本稔作品を、島木健作や北條民雄、明石海人の作品と比較してみて来たが、最後に沖縄現代文学作品を取り上げることにする。
1992年具志川文学賞を受賞した大城貞俊「椎の川」

は、太平洋戦時下沖縄本島北部東海岸の楚洲村を舞台にしたハンセン病文学である。

村の「松堂」家の嫁で30歳近くになる「静江」は、3人目を孕んだ頃から、体の異常を感じるようになり、医者にかかったところ、「ナンブチ（ハンセン病）」と診断された。村人は療養所行きを強く勧めるが、夫の「源太」は、かたくなに拒絶し、病の進行した静江を遠く離れた診療所に背負って半年通った。しかし源太に召集令状が届き、静江は人里離れた海岸に小屋を作ってもらい、そこに一人で住むことにした。静江の子で7歳の「太一」と3歳の「美代」は、ある日、隠されていたその小屋を捜し、逢いに行くのだが、声音を変えた母から脅され、逃げかえることになる。やがて戦争が激しくなり、静江の3人目の子の「幸子」も死んでしまい、太一と美代は、幸子の墓の上に無数の蛍に交じって昇っていく「静江」と「幸子」の大小一組の光の塊を見るのだった。

ハンセン病者の夫婦愛、親子愛を基調として、ヤンバル（沖縄北部）の自然や子供の遊び、村の行事、そして戦禍のあり様までを描き込んだ抒情的小説であった。

また、この小説には、『沖縄救癩秘史―愛の村』の主人公青木恵哉の療養所建設運動とも関わる、1931年から翌年にかけて沖縄本島北部羽地村を中心に起こった住民約2万人によるハンセン病療養所建設反対運動のことが描き込まれ、「人々の病に対する偏見と恐怖心が、大きなエネルギーを生み出す源泉ともなった」との叙述もあった。[22]

沖縄北部今帰仁出身の作家目取真俊に「ホタル火」（2004年）という短編小説がある。

この小説の舞台は、沖縄のある村で、時代は、やはり沖縄戦時下である。

国民学校の女生徒「チルー」は、村人や家族から行ってはならないと言われている浜に潜入し、そこの小屋で30歳くらいの女に抱かれている発育不順の「化け頭」の少年と「布を手に巻いて」「女の後ろに隠れるようにした」男を見る。「チルー」は、九州に疎開する同級生の男児から、蛍狩りに誘われ、数十匹の蛍が火を放つ竹筒をもらう。「チルー」は光る竹筒を「化け頭」の少年にプレゼントした。やがて米軍が上陸し、村人たちは洞窟に避難する。そこに「化け頭」の家族三人がやってきたが村人から追い返される。どうにもできなかった「チルー」は「自分への怒りと悔しさ、無力感に涙が流れた」。しかし、村人の「あの輩達や、海に向かてぃ、米軍に合図送るつもりやさ」「やっぱりスパイだってるさ。さっきで殺しておけばよかったのに」という語に影響され、軍艦の砲口が向けられる恐怖に「（「化け頭」を除いた―引用者注）二人に対する憎しみが胸の中に噴き出した」。「化け頭」の家族は結局崖の上から落ちてしまう。戦争が終わって、「チルー」は、三人の落ちた崖の途中に引っかかった「竹筒」と、「崖の下の深い群青の海を動いている三つの光」を見るのだった。[23]

この小説は、「椎の川」と同じく、沖縄戦時下という時代設定に、「蛍」を小道具として使いながら、少女とハンセン病の少年との交流を通して、村人のエゴイズムだけでなく、少女を通して同情の危うさ、不安定さを抉っていた。

七　まとめ

以上のような日本と沖縄の作品比較を通して、以下のようにまとめられよう。

病者の実存の描かれ方として、島木「癩」では病者の魂の救済方法として「思想」があげられ、北條「いのちの初夜」および海人短歌では文学創作があげられたのに対して沖縄の国本の詩では、「宗教」が提示されていた。また病者の描かれ方として、戦前沖縄作品の「顛末」では悪業の報いとして病者が描かれ、さらに病者との関りに着目すると、沖縄現代作品「椎の川」では、村人からの差別と病者の家族愛、親子愛が表現され、同じく「ホタル火」では、病者との友情の不可能性が表現されていたということになろう。

注

（1）『島木健作全集』第1巻（国書刊行会、1976年）p29～p30

（2）同前p30

（3）同前p34～p35

（4）同前p41

（5）同前p46

（6）『沖縄文学全集』第6巻（国書刊行会、1993年）

（7）なお、川端は、戦後1958年沖縄愛楽園で北條を例に出して、少年を励ましたエピソードが伊波敏男自伝『花に逢はん』（1997年、日本放送出版協会）に出ている。

（8）『定本　北條民雄全集』上巻（東京創元社、1996年）p47

（9）同前p50

（10）同前

（11）同前

（12）1部と2部の違いについては、『明石海人歌集』（岩波文庫、2012年）巻末解説「明石海人の闘争」（村井紀）に詳しく論じてある。

（13）沖縄の国立ハンセン病療養所である沖縄愛楽園設立に尽くしたとされるキリスト教伝道師青木恵哉についての太平洋戦時下1943年出版の伝記小説『愛の村―沖縄救癩秘史』著者三浦清一（1896～1963）がある。

（14）以上の「紅い蟹」からの引用は、『沖縄文学全集』第7巻（国書刊行会、1990年）から。

（15）以上の引用は『終着駅からの手紙―国本稔遺稿集』（阿波根ハル、1987年）から。

（16）『終着駅からの手紙』p130

（17）同前p131

（18）同前ｐ132～ｐ133
（19）「あとがき」注（15）と同じ。
（20）「亡き君を偲んで」同前ｐ143
（21）同前ｐ138～ｐ139
（22）大城貞俊『椎の川』（朝日新聞社、１９９３年）ｐ21
（23）目取真俊『面影と連れて』（影書房、２０１３年）

参照文献

我部聖「沖縄文学のなかで病はどのように描かれたのか」（『けーし風』107号、新沖縄フォーラム刊行会議、２０２０年）
仲程昌徳『沖縄の文学』（沖縄タイムス社、１９９１年）
三浦清一『愛の村―沖縄救癩秘史』（鄰友社、１９４３年）
伊波敏男『花に逢はん』（日本放送出版協会、１９９７年）
小坂井澄『兄啄木に背きて　光子流転』（集英社、１９８６年）
国本稔『終着駅からの手紙―国本稔遺稿集』（阿波根ハル、１９８７年）
『うるま新報』復刻版（不二出版、１９９９年）
『沖縄文学全集』第２巻、６巻、７巻（国書刊行会）

付記

＊本論文には、差別用語が使われているが、歴史的用語としてそのまま記している。
＊本論文は、拙文エッセイ「沖縄のハンセン病文学」（『草茫々通信』14号、佐賀市・２０２０年）を全面的に改稿したものであることをお断りします。

（うらた　よしかず・久留米大学大学院客員教授）